

ト』(協和企画通信・1994～96)の資料を提供したことがきっかけだったと思います。先生はお酒は嗜まれなかったようですが、大阪人の中でもとりわけユーモアに豊んだかたでした。お葉書・お手紙をたくさん頂戴しました。私と違って進歩的で、すべて必ず横書きでした。私の所属宛名が「北里研究所東洋医学総合研究所医史学[・]研究部」でしたから、「あんたがたはよっぽど研究がお好きですなあ」と皮肉られたものです。ビール券やビール詰合わせなど「貰い物ですので棄てて下さい」といって毎度送って下さいました。お仰せに従って喜んでお腹の中に棄てたことです。三木榮先生旧蔵の貴重な高麗版『大藏経目録』を、「私には猫に小判です」といって惜しげもなく贈与して下さいました。

一番のご恩は、当時武田科学振興財団杏雨書屋の運営委員長であった芝哲夫先生に、私を運営委員に推薦して下さいましたことです。杏雨書屋の運営委員は全員関西在住の先生が勤めるのが前例でした。破格のご高情を賜りました。生涯感謝の念に耐えません。

先生からのお便りは、平成16年9月20日日付の葉書が最後でした。病に臥せられているにもかかわらず、しっかりした内容で、大塚恭男先生、芝哲夫先生のことなどに心遣いされたものでした。その後、私からももっとお見舞いのお手紙を差し上げるべきでしたが、失礼のまま終わってしまったこと、今さらながら悔やまれてなりません。

長門谷先生。ほんとうにありがとうございました。衷心ご冥福をお祈り申し上げます。

巨星また落ち関西の医史学は暗夜行路に

田中 祐尾

「宿痾の望診日々に疎まし」とは中国古医の戒言ですが、宿痾は長期の病、望診は視診を意味し、「長患いの病者への注意はつつい疎かになる」という戒めです。当会名誉支部長長門谷洋治先生は去る七月十一日、奥様の言によると「あっと云う間に逝ってしまいました」とのこと。「日々に疎まし」だったのは関西支部をお預かりする私事務局長であります。ご逝去の報に接したのは随分遅れてから、茫然自失為すすべ知らずでありました。

十三年間の看病生活の辛苦は察して余りあり、何故もう少しお見舞いを重ねなかったのかと慙愧に耐えず、悔しき限りです。ほぼ誰にも知らせず密葬を済ませ今は静かに余生を送りたくあれこれと立ち入ってほしくないという意味のおことばに接し、支部からの献花(供花券)を受け容れていただくのが精いっぱいでありました。

顧みますに、長門谷先生と私との具体的な会

の関わりは平成十年頃だったと思います。当時春秋二回開催し続けていた関西支部例会学術集会の会場を京都でばかりお世話になっていた成り行きに、今は無き杉立義一先生が「久しぶりに大阪で会場を探してみたい」「予算が乏しいのでそこを何とか」と長門谷先生の仲立ちで私にアプローチされたのが初めだったと思います。私は当時大阪市大医学部同窓会の卒後教育に関わっていましたので、医学部長らに会って教育の一環という名分で同校の学舎を無料で貸してもらうことに成功しました。その後京都と交互に、現在なお定期的に開催するという実績を積んでいます。当時の医史学会本部は大阪での総会が中野操先生以後久しく開かれていないので、近い将来大阪でどうかという意向の在ることを知り、医学部長やできれば市長(同医学部出身)にも顔を繋いでおこうと画策し始めたのもこのころでした。支部学会の開催日には医学部長に挨拶してもらったり、当時

新築の医学部建屋に蒲原, 杉立, 中山, 長門谷といった幹部をどやどやとあちこち案内したのを覚えています。誰の目から見ても長門谷先生が次期大阪開催の会長として相応しく皆が当然の成り行きと認識していました。

ところが持ち前のシャイな性格と温厚かつ強固な意思の持ち主であられた長門谷先生は頑として腰を挙げず支部例会だけはコツコツとお続けになりました。支部の貧乏さ加減といえば人件費が捻出できず, 受付には奥様が常連で座られ, 私の家内も見かねて手伝ってくれました。私の出身外科の医局員が, 私の息子を含めて手弁当でスライド係をしてくれたこともありました。その当時歴史を扱う学会とはこんなものかと思っておりました。

平成十三年長門谷先生は突然お薨れになり, 約一か月意識不明となられました。殆ど不眠不休の奥様の看病と当時関西労災病院勤務の御子息を中心にした脳神経科医師団の懸命の集中治療が功を奏し奇跡がおこり意識が戻られて, それから十三年に及ぶ長い闘病生活が続きます。こちらの方が家族にとってはお辛かったに違いありません。このときの奥様にとって医史学会などといった余分な存在は災いの元凶であったと推察します。

私が当支部を実質お預かりしてから十数年, 多くの関西を始めとする医史学の巨星たちが身罷られました。私の偏見として, 何れの先生方も医史学に, 生業を置き去りにして没入されるあまり, 没後ご家族に接触を嫌われることが多く, 事務局としては遺された資料の追跡に暗夜行路を歩まざるを得なくなります。

平成十九年, 大阪での第百八回日本医史学会総会を私が主宰致すこととなり, 色々の経緯をクリアして当時の関淳一大阪市長まで登場願って大阪市大医学部で開催の運びとなりました。長門谷先生には車椅子で一目なりとも来場願って, 年来の悲願を遂げようとしたのですが, ご来場叶わずとうとうあの笑顔を拝見することはできませんでした。

関西はおろか日本の看護学, 看護歴史学の重鎮とそのお弟子さんたちが, 長門谷先生の人格と業績を慕って関西支部に在籍され続けていることをよく承知していた私にとって, 学会などでお会いする度に「先生の御加減は如何ですか」と訊かれるのがこの方たちでありました。本職が看護師であるこの方々はつい昨年支部学会にも出席され同じ呼びかけをされました。共に心からご冥福を祈ります。